

1. まえがき

爽やかで、靈感に満ち、感情豊かなメンデルスゾーンの曲に魅せられた人は多いと思います。私も 20 台の頃はピアノトリオや、オクテットに夢中になり、コンサートで何とか弾いた時の喜びは、今でも忘れられません。しかしメンデルスゾーンには、もう一つの画家としての顔があります。

ここでは前半で彼の生涯について簡単に紹介し、後半はメンデルスゾーンの画家作品と、彼が「真夏の夜の夢」をイメージして描いたと思われる絵画について、推測を交えて述べさせていただきます。

2. メンデルスゾーンの生い立ち

フェリックス・メンデルスゾーンは裕福な銀行家アブラハムの長男として、1809 年に北ドイツのハンブルグに生まれました。芸術に良き理解を持っていた両親（祖母がマタイの自筆譜の写本を贈るレベルです）は、子供達の教育には厳格に臨みました。フェリックスは 4 歳になると、姉のファニーと共に、毎朝 5 時に起こされ、ピアノのレッスンを受けたそうです。また、父親のアブラハムはフェリックスを学校には行かせずに、音楽はもちろん、一般教養的な科目指導もすべて家庭教師に任せ、英才教育を施しました。フェリックス少年は、風景画を上手に描く技法も学んでいます。後年、彼が旅行先で好んで絵を描いたのは、この少年時代に身に着けた経験が基になっているのでしょう。



図 1 フェリックス少年

メンデルスゾーン一家は当時一流の画家との交際もあり、姉の夫のウィリアム・ヘンゼル（プロシア宮廷の画家）が描いた 12 歳の、少女のように愛らしいメンデルスゾーンの肖像画（図 1）もあります。

メンデルスゾーンは早熟の天才という点ではモーツァルト以上と評され、「西洋音楽の歴史上知られている中で、最大の神童」（ローゼン）との評価もあります。12~14 歳で作曲した 13 曲の弦楽のためのシンフォニアは、メンデルスゾーン家の日曜音楽会用でした。これらは彼が音楽的に深い影響を受けたバッハの名残である、明確な調性と対位法が使用された作品群ですが、メンデルスゾーンがその力量を発揮した最初の名作は、「弦楽八重奏曲 変ホ長調」（16 歳で作曲）でしょう。この曲の第 4 楽章には対位法が多用され、その躍動感に魅せられます。また 17 歳で書かれた、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」への「序曲」も彼の代表作であり、これらは今でも演奏プログラムの定番になっています。

3. メンデルスゾーンの家族

メンデルスゾーンは姉のファニー・メンデルスゾーン（図 2）とは特に強いきずなで結ばれていました。ファニーはメンデルスゾーンと一緒に音楽を学び、おそらくメンデルスゾーンと同じくらい、音楽の才能に秀でていたと言われています。彼女は生涯、メンデルスゾーンの心の友、よき理解者、よき導き手でした。彼はこの姉を誰よりも深く敬愛し、彼女もメンデルスゾーンに多くの作曲の助言などを与えたようです。この姉のファニーが 41 歳の若さで急逝したとき、悲嘆にくれたメンデルスゾーンは心の支えを失ったかのように活力を失い、半年後には後を追うように 38 歳 8 ヶ



図 2 姉のファニー

月の生涯を閉じています。姉と同じく、脳梗塞が死因でした。最晩年の「弦楽四重奏曲第6番」は、姉のファニーの死の直後に書かれた作品で、「ファニーへのレクイエム」と呼ばれています。これは彼には珍しく、憚ることのない慟哭で始まる作品で、救われない悲しみが感じられます。最後まで聴くのは辛いかも知れません。

図3は幸せな時代（1840年）に31歳のメンデルスゾーンが描いた家の中の様子です（以下、メンデルスゾーンの描いた絵にはMを記入）。右のソファに座り、子供を抱いている妻セシルも画家でした。彼女はメンデルスゾーンと

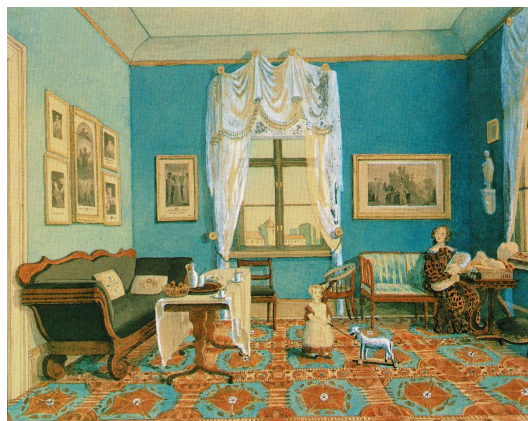


図3 メンデルスゾーン家の青い部屋 M

の間に5人の子供を設け、彼の死後6年で若くして死去しましたが、子供達は活躍しています。長男カールはハイデルベルグ大学の歴史学教授として、「ツァラトウストラはかく語りき」の著者で、哲学者のニーチェとも親交がありました。次男のパウルは20歳代で染料のアニリン製造工場を設立、成功を収めています。フェリックス（メンデルスゾーン）の直系以外では、20世紀にエレオノーラ・メンデルスゾーンという美貌の女優が現れ、ドイツ歌劇団でシェイクスピア劇を演じて注目され、大ピアニストのエドウィン・フィッシャーと結婚しています。彼女はナチスの迫害を逃れ、アメリカに渡ってブロードウェイのステージにも立ちました。

4. 画家としてのメンデルスゾーン

よく旅に出たメンデルスゾーンは、旅先で目にした風景を素早くスケッチで描き残しました。写真機の無い時代でしたので、自らの手でスケッチを描くしか、目にしたものを残す術はありませんでした。彼が旅先から家族に送った多数の絵葉書（図4）には、彼自身のスケッチが描かれています。幼少期の英才教

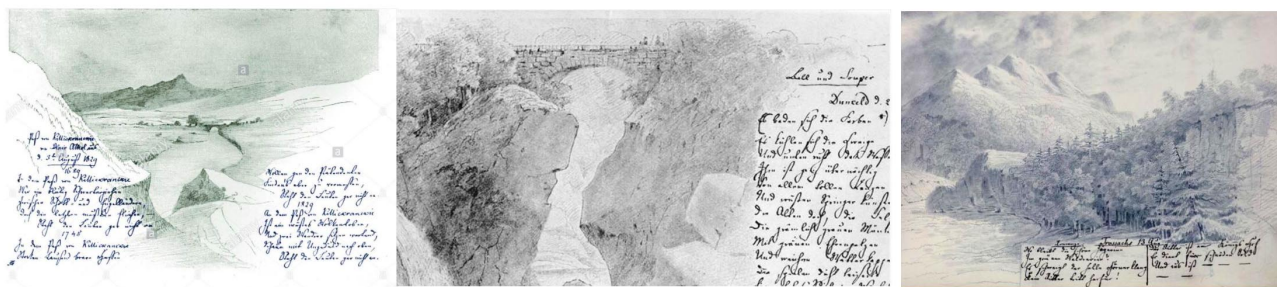


図4 メンデルスゾーンの自作の絵葉書 M

育で風景画を学んだとはいえ、短時間でこれほどの絵を描きあげる才能には驚かされます。

図5は22歳のイタリア旅行時に、メンデルスゾーンが描いた水彩画です。彼の交響曲第4番「イタリア」はこの旅行後に作曲された彼の代表作ですが、躍動感に満ちた第1楽章冒頭のテーマからは、イタリアの青い海を目にしたメンデルスゾーンの感動が伝わってきます。旅先でこの絵を描きながら、交響曲第4番「イタリア」の作曲も、同時に彼の頭の中で始まっていたのでしょう。



図5 南イタリア アマルフィの風景 M

メンデルスゾーンが20歳の時のイギリス旅行で着想を得た、交響曲第3番「スコットランド」、序曲「フィンガルの洞窟」も代表的な音の風景画です。「スコットランド」の第2楽章（クレンペラー盤）を聴くと、車窓をゆったりと流れるスコットランドの風景が目に浮かびます（当時鉄道は黎明期で馬車か？）。

図6はメンデルスゾーンが描いた聖トーマス教会です。ここはバッハが音楽監督を務め、「マタイ受難曲」を生み出した場所でした。実は「マタイ受難曲」の自筆稿の写本を、メンデルスゾーンは14才のクリスマスに祖母からプレゼントされ、大変喜んだようです。彼は20歳で「マタイ受難曲」の歴史的な復活上演を果たし、当時既に忘れ去られていたバッハの音楽は、再び脚光を浴びることになりました。



図6 聖トーマス協会とバッハの仕事部屋 M

後年、26歳でゲヴァントハウス管弦楽団の初代指揮者に着任したメンデルスゾーンが、ライプツィヒの自宅の窓から聖トーマス教会を描いたのがこの絵でした。かつてJ.S. バッハが暮した建物が、この時代にはまだ存在していました。建物右端の小さな窓のある建物内に、バッハの仕事部屋があったそうです。音楽家のメンデルスゾーンがバッハを復活させ、一方では画家の、もう一人のメンデルスゾーンが、おそらく敬意をこめて、この絵を描き残したのでしょう。バッハの仕事部屋からチェンバロの音が聞こえてくるような素敵な絵です。

「夢人館 7 メンデルスゾーン」には、画家としてのメンデルスゾーンの絵画作品や、既に述べたような家族のエピソードも数多く紹介されています。そこに以下の文がありましたので、紹介します。

「メンデルスゾーンは絵画とデッサンの中に、彼の音楽的言語を刺激する豊かな水源を見出していたに違いない。メンデルスゾーンにとって視覚的なものと、音楽的なものは常に作用しあっていた。そしてメンデルスゾーンの画家としての眼（もう一人のメンデルスゾーン）はこの作曲家の耳から決して離れなかった視覚的なイメージを、忠実に捕えていた。」

5. 「真夏の夜の夢」のイメージをメンデルスゾーンが描いた絵は？

さて、それでは最後に「真夏の夜の夢」を題材とした名画との比較で、メンデルスゾーンの描いた「真夏の夜の夢」に迫りたいと思います。

シェイクスピアの「真夏の夜の夢」を題材として、スコットランドの画家画ジョゼフ・ノエル・ペイトンが描いた「オーベロンとティターニアの諍い」が図7です。この絵をペイトンが描いたのは1846年ですので、メンデルスゾーンが亡くなる前年です。「真夏の夜の夢」の作曲はその20年ほど前でした。このペイトンの絵は「妖精画の最高峰」とも評価されていますが、描かれている妖



図7 スコットランドの画家ペイトンが描いた「オーベロンとティターニアの諍い」

精達は、妙に生々しく怪しげです。

一方で、メンデルスゾーンが「真夏の夜の夢」(序曲)を作曲してから2年後に、22歳で描いた「ダーラムの大聖堂」(イギリス1829)の絵(図8)は、この序曲の62小節目から始まる、「森の中から宮城が見えた」というシーンにぴったりと思えます。人物画はあまり描かないメンデルスゾーンですので、この絵は風景画で妖精も描かれていません。しかし、このメンデルスゾーンの絵は、妖精の動きを繊細な弦の響きで表現した、爽やかで気品に満ちた彼の序曲の雰囲気にながります。「邪気のない無数の妖精たちを彷彿とさせる第一主題の繊細な弦の音の粒こそ、メンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」序曲の命」という評価もあります。

同じシェイクスピアの「真夏の夜の夢」を題材としていても、ペイトンの絵とメンデルスゾーンの絵ではかなり違います。おそらく、メンデルスゾーンは頭の中で、「真夏の夜の夢」についての彼のイメージを作り上げて作曲し、その後イギリスに旅行した時に、森の中から現れたダーラムの大聖堂の風景に出会い、直ちに彼が作曲した音楽の(本来の)イメージを重ね、風景画として描いたのでしょう。「真夏の夜の夢」(序曲)の作曲に際して、メンデルスゾーンに助言をしたA.B.マルクスは、「メンデルスゾーンは本質的に画家が色彩を取り扱うのと同じように、管弦楽の技法を取り扱った」、と語っていますが、音楽と絵はメンデルスゾーンにとって、本質的に表裏一体だったのかもしれない。



図8 ダーラムの大聖堂 M

6. メンデルスゾーンの他の音楽作品について

ここでは紹介しませんでした。メンデルスゾーンの室内楽には上記の「弦楽八重奏曲」の他に、ベートーヴェンから多くの着想を得ている初期の1, 2番の弦楽四重奏が爽やかで、親しみやすいものです。また、30歳の頃の円熟期に作られたピアノ三重奏曲1番は、古今のピアノ三重奏曲の最高傑作のひとつです。特に冒頭のチェロのほの暗く美しい旋律が感情豊かに奏されて、ヴァイオリンが引き継ぎ、そこにピアノが見事に絡み合い、情熱的に進む様は実に見事です。

また、比較的晩年の作である「ヴァイオリン協奏曲」も、広く親しまれている点で最高傑作と言えるでしょう。短い序奏の後の哀愁を帯びた旋律、メンデルスゾーン自身の手によるカデンツァも見事で、全楽章が切れ目なしに演奏されます。瑞々しく、気品に満ち、メンデルスゾーンらしさが随所に現れます。

7. あとがき

「真夏の夜の夢」の解説というよりは、メンデルスゾーンの画家としての顔について、重点を置き、詳しく紹介させて頂きました。幼少期の環境や、素敵な家族(特に姉のファニー)との強い絆も、彼の音楽が生まれる背景として、重要なポイントと考えます。また現存していない、バッハの仕事部屋の風景が、メンデルスゾーンによって描かれていたことは、私にとっても驚きでした。メンデルスゾーンは豊かな才能に恵まれ、その短い生涯の中で数多くの名曲を残した作曲家でしたが、彼が描き残した絵もまた、多くのことを語ってくれます。この解説を書きながら、私の中でメンデルスゾーンの存在が、さらに大きくなりました。また青年時代に戻って、メンデルスゾーンの音楽に浸りたいと感じています。